

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成30年5月 第207号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

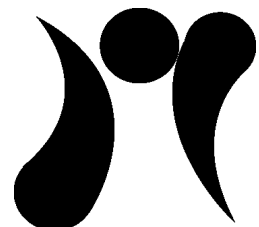
介護現場が描く「加古川創生の道」

今は「人生100年」の時代ですが、平均寿命が延び続けるその一方で、少子化が拡大し続けています。今40代半ばの団塊ジュニアの同級生は200万人を超えていますが、昨年2017年の新生児は94万人余でした。『超高齢・超多死』と『超少子』が同時に進行して人口が急速に減少し、50年先にジュニア世代が人生を締め括る頃の日本の状況が気掛かりです。

日本社会の現状は、『地方創生』と言われながらも東京一極集中が拡大し続ける一方で、地方都市は人口減少と地場産業の疲弊が進みます。加古川の街も今は、スーパーやコンビニが多く「安くて便利で住み易い街」ですが、その未来が明るいとは決して思えません。目先の利便性に囚われている内に、弥生時代以降2000年近くも続く「街の歴史」が消えかかっています。白砂青松と詠われた遠浅の海岸も、ヤマトタケル神話を生んだ鹿児の川も、17世紀頃に数多く造られた溜池も、日々の生活からは縁遠い存在となり、工場や宅地の開発が進みます。海岸は全て大手製鉄会社、池も農地も宅地になり、スーパーには世界中から集められた肉や野菜・魚が並び、ネット注文の商品が増えてITやAIで瞬時に世界とつながる、便利な暮らしが可能に成りました。

しかし人間は、「自然界の一員」として『生身の心身の限界・死』から逃れる事は出来ません。その限界も死も超えて、歴史を続けてきたのが人間です。全く無防備な姿で生れる乳児は、親や大人にその身の全てを委ね、10年以上も養育されて年少者に成長します。人は動物の中では「異例に長い養育期間」を必要とします。そして社会で生産活動に従事して後、人生を締め括る時にも又10年前後の期間、無防備になった老いの身を仲間に委ねて最期を迎えます。「生殖機能を失った後の生きる期間」が異例に長いのが人間の特性であり、人生の最終場面で「老いの身を仲間に委ねる習性」が、動物の「群」と「人間社会」の決定的な違いを生み出したように思えます。

(次ページに続く)



(前ページの続き)

遺伝子で引継ぐ「本能や習性」に加えて、人間は老いて無防備な身を仲間に委ねて、社会を構成する為に必要な『思想と社会性』を引継ぎます。老いと死の過程は、「生身の命の限界」を超えて関係性が続き、社会を引継ぎ歴史を続ける為の「社会性と創造性」に満ちた営みです。人は幼少期に他者に身を委ねて、無条件に自らを受容れる愛情を注がれ、無意識の中で他者への信頼感を蓄積します。そして人生の最終場面でその信頼感が働いて、老いて無防備な身を子や仲間達に委ねて最期を迎えます。その関係性が死後にも続いて、子や仲間の心の奥に宿る『感性・感覚』と『思想』を支え、誰もが『覚悟して』最期の瞬間までベストを尽くし、懸命に生きる道を『自らが拓く』のです。

多様な変化を繰り返す自然界と人間社会の中で、変化に応じて柔軟に生き延びて来た人間は、個人的願望や目先の利害・損得を超えて、多様な人の存在や望まぬ状況を柔軟に受容れる「寛容さと許容性」を持ち合わせて、1000年～2000年と歴史を続けて来ました。「一極集中の社会」は長くは続かず、「多様性」が変化を切り抜ける鍵です。歴史が其れを教えます。

福祉や介護の現場は保育や教育と同じく、寛容さと許容性を原点として「多様で柔軟で永く歴史が続く社会」の『基礎』を創り出す為の重要な営みです。弥生時代以来2000年近く人の営みが続いた「街の歴史」を絶やす事なく、更に500年～1000年と変化に対応し続ける為に、50年先～100年先を見据えた多様な取り組みを願い、介護現場から発信いたします。

- 1 加古川市には、法務省管轄の矯正施設が4つあり、2少年院・2刑務所に2千人以上が暮らす全国的に珍しい街です。彼らが出所後の第一歩を踏み出す際の「社会復帰プログラム」を用意し、誰もがベストを尽くして懸命に生きる道を歩み始められる『人間再生の街・加古川』を創生しよう。
- 2 『川と池と水』は加古川市民の財産です。加古川大堰や各所の溜池を潤いと活力を生み出す「水に親しむ公園」に活用しよう。JR加古川線の加古川鉄橋を改修して国際規格のボート競技場で『加古川レガッタ』を開き、加古川右岸・上荘地区にJRの駅を創り、老人も子供も障害者も誰もが共に、水に親しみ水にチャレンジする「国際的な街」にしよう。
- 3 老人や障害者も参加して「生産と消費」が地域内で循環する仕組みを創ろう。市内各所に「地産・地消の店」を作って、人と人とのつながりと賑わいを取戻し、クルマに頼らないで暮らせる「加古川の街」を創ろう。
- 4 バトンタッチを終えた人の『霊柩車と葬送の列』に、誰もが敬意を表す街にしよう。団塊の世代が超多死社会の主演として、幼子達と「死後にも続く関係性」を築いて、「QOL」高く人生を締め括る仕組みを創出し、団塊ジュニアの高齢期までには「超少子」に歯止めを掛けよう。

市民の一人ひとりが目先の利害や利便性に囚われず、『街の歴史』と『街の未来』をつなぐ視点を基にビジョンを描き夢を膨らませ、如何なる変化にも柔軟に対応するチャレンジ精神を蓄えて、多様な取り組みを模索して欲しいと願います。今年2018年は市長・市議会議員選挙の年です。「多様性と柔軟性に満ちた加古川の未来」を築く為に、50年先～100年先を見据えた『価値ある議論』が始まる年にしたい、と心より祈念いたします。

Tさんの看取りについて

地域密着型特養 西田 薫

(介護福祉士)

Tさんは脳内出血を二度発症され、右半身不全麻痺と失語症・構音障害を持っておられました。せりょう園の利用は、ご家族とのトラブルがあり緊急でショートステイの利用になりました。ご家族とのトラブルといっても色々な理由はありますが、Tさんだけに問題があったわけでもなく、ご家族間の問題や苦悩もあった中での利用開始だったようです。そのような経緯をお持ちでありながら、Tさんはニコニコといつも笑顔で接してくださり、嫌な事はハッキリ嫌だと伝えてくれます。何か希望があればジェスチャーで上手く伝えてくださり、職員とはいい関係を築けていたと思います。ご家族とは一度離れて生活していくうちに、少しずつ面会があり、ゆっくりと長年共に生活してこられたように、良好な関係に戻っていかれたように思いました。

失語症・構音障害はお持ちでしたが、言葉が出にくそうな時は一言一句ゆっくり促すと短い言葉であれば、促した後に続けて話してくださる事もあり、コミュニケーションはリハビリにも繋がられたのではないかと思います。

お年寄りの方々は野球中継や相撲が好きだと思っていましたが、Tさんは野球中継や相撲は嫌いな方で、テレビに映ると動かせる左手で顔を覆ってしまうほどでした。同じ場所で過ごしている利用者に対して気が合う、合わないがあったのか、合わない人が近くに来るとそっと傍から離れたり、また大声で嫌だと訴えたりすることもありました。しかし、Tさんが入所されていた期間に、他の利用者の方が何名か亡くなられ、その中でもTさんと仲良くされていた利用者が亡くなると、葬儀に参列し、遺族の方と共に涙を流して別れを偲んでいらっしゃった事も印象深いです。

季節の変わり目に発熱することはありましたが、体調もほとんど変わりなく、食事の時間を何よりも楽しみにされていました。食べ過ぎで嘔吐されるくらい食欲旺盛な方でしたが、平成29年2月3日にインフルエンザに罹られました。それからは今まで元気だったTさんが嘘のように体調が少しずつ悪くなっていきました。そして何時もニコニコされていたTさんもご自身の体調の変化に戸惑い、苦しい思いをされていたのかもしれない。職員に対しても気が合う、合わないがあったのか、介助をしようとする手振りなどがありました。私もその内の一人です。そのような中、インフルエンザは完治されても、夏の間はずっと原因不明の嘔吐が続き、体調が戻らないことがTさんを苦しめていたと思います。Tさんは体調が万全に戻りきれないまま、平成29年9月21日の深夜、逝去されました。

晩年のTさんにとっていい介助ができていたかどうかは今となってはわかりませんが、苦しんでいるTさんに少しでも寄り添い苦悩を共有できていたらと思います。Tさんの生活をお手伝いできたこと、看取りを通じて学んだことの中で特に、失語症の方とのコミュニケーションの取り方、半身不全麻痺の方の介助の仕方など、Tさんから学ばせていただいたことはたくさんあって、どれも印象深く忘れられません。学ばせていただいたことに感謝し、これからの介護にも繋がっていきたいと思います。



W さんは平成 27 年 4 月 16 日にユニット 3 丁目 6 番地に入所され、平成 29 年 12 月 9 日に亡くなりました。私がユニット型特養に異動になったのは、平成 27 年 11 月からですので、W さんがユニット型特養で生活を始めて半年が過ぎた頃の出会になります。その後、約 2 年間に渡り、ユニット型特養での生活に関わらせていただきました。

W さんは自他共に厳しく、己の意見はきちんと伝え、時には投書にて必要と感じた事を積極的に発信される方でした。また、非常に大柄な男性であり、交通事故の後遺症で下半身麻痺のある方でした。職員一人では W さんの身体を支える事は難しく、移乗介助の際には複数の職員で支え、バランスを崩さないようにしてスライディングボードを活用する等、様々な工夫をしました。

初めてお会いして挨拶をし、車椅子からベッドへの移乗介助をする事になった際は、「あんたはこの仕事をどのくらいしとるんや？」と尋ねられました。私が「かれこれ 10 年程です」と答えると、「それなら要らん口出しはせんでも良いな」と、笑顔で介助を受けて下さいました。恥ずかしながら、その時の移乗介助はあまり上手くいきませんでした。W さんは「まあ、最初やしな。あんたやったら、ちょっと練習したらすぐ上手になるわ」と、私自身を見て、至らなかった点や今後の希望等をしっかりと伝えて下さいました。このような出会いから始まり、日々の生活を共にさせていただく中で、W さんの人となりも分かってきたと思います。

普段より自身の意見、訴えを積極的に発信され、移乗の手段や入浴の方法、風呂の温度や夜間の見回りの際の声掛けの仕方、布団のたたみ方やお茶の用意の手段等々、実に多くの事を伝えて下さいました。とても自己主張の強い方なのですが、W さんは利用者の方々の中で、最も私達職員の立ち居振る舞いを見ておられ、「自分や周りの利用者のより良い生活の為に意見を言う」「職員には今よりも成長し、もっと良い職員になって欲しいから意見を言う」と言った意図が、日頃接していてよく伝わってきました。

印象的なエピソードに、以前に暮らしていた施設にて、その施設の新人職員が移乗介助に失敗してしまった際、「自分がこの方法で移乗して欲しいと言って転倒したのだから、職員に落ち度はない」と、その施設の施設長へ手紙を書いた事もあったそうです。同じく、せりょう園でも「自分を実験台にして、介助の練習で落とすのも良いから成長してほしい」と話されていました。実際にユニット型特養の職員の多くが W さんと接し、意見を聞き、訴えに応える事で、技術だけでなく利用者の方々視点に立つと言う意味でも成長できたと思います。

そんな W さんですが、季節が秋に移る頃から、ベッドで横になる時間が徐々に増えていきました。日課であった新聞記事のチェックも、嗜んでいたクロスワードパズルも、その頻度は徐々に減っていきました。11 月に入る頃には、頻回に微熱が見られるようになり月末には 39 度の高熱も見られるようになってきました。本人は病院を嫌い、受診はせず、「エアコンも要らん。大丈夫」と普段と同じ口調で話され、職員や看護師も、私達に見せる普段とあまり変わらない毅然とした様子に、『W さんは大丈夫』と、どこかで思っていました。主治医の助言と家族からの強い希望もあり、検査だけはと受診した事で、その時には既に数日の命である事が分かりました。その受診日が、亡くなる前日の事でした。亡くなる間際までは「何も悪いことしてないのに、何でこんな事になるんや……」と嘆かれていましたが、最後には職員へ「ありがとう」と繰り返し伝えて下さいました。最後の最後まで、私達の良く知る、毅然とした W さんでした。

W さんは自他共に厳しく、己の意見をきちんと伝え、生きる事に積極的に、日々の暮らしを通じて多くの職員や利用者との間に信頼関係を築かれていたと思います。職員に支えられるだけの生活ではなく、自分自身



を受け入れての、自分自身の人生を全うされた W さんの人生に接し、看取りだけが特別なものではなく、利用者との日々の全てを含め、その人生から様々なことを学ぶ重要さを意識する事が出来たと思います。

介護についてみんなで語ろう会【平成 30 年 3 月 23 日】

相談員 岩田 みつ子

今回の語ろう会は「老いを生きる」をテーマに平成 26 年 6 月のせいりょう園の機関紙に掲載した老化曲線の図を基に、自身の老いとその先にある最期について話し合いました。ピンピン・コロリと逝きたいという願望は誰しもが持っていて、その事が本人と周囲が幸せであるかのように詠われています。しかし、ピンピン・コロリの最期は現実的ではなく、老いの過程で健康で自立した生活の暮らしかから、病気や障害に罹りながら亡くなるまでが今や 7 年～10 年と言われています。その期間に次第に老いていく事を受け入れ、死を覚悟し、最期の時に石飛先生（特別養護老人ホーム・芦花ホーム常勤医）曰く『死ぬことを見せる』、その大切な偉業をできる期間だと考えれば、ピンピン・コロリは幸せではないことなのかもしれません。

語ろう会に参加された方の中には他者からの支援を受けて暮らす期間があった方が良いという声をお聞きしました。しかし、他者に身を委ねる期間については「1 週間、いや 2, 3 週間やな、それで死にたいわ」「迷惑をかけたくないしなあ」と、そう遠くない自分の事として真剣に考える事が出来にくい事も現実です。今までは「妻も先に亡くなり、自分の最期なんてどうなるかわからへんし、考えられへんわ」と発言されていた方が「エンディングノートに自分の最期の事と娘に伝える事を書いていて、それはその時の自分の状況に合わせて修正している」ということを話されました。片や「何回もエンディングノートを出して書こうとするんやけど書かれへんのや」と思いを話される方もいました。人それぞれの向き合い方で終末期をいかにソフトランディングで終えるかと真剣に考える機会を今後も皆さまと共有出来たらと思います。

メイキ薬局で薬剤師をされている伊藤さんに参加いただいてお父さんの看取りについてのお話をお聞きしました。癌の告知、そして死が近いことを自分自身が父に告げたかった思い、何十年と確執があった関係をそこで許した感情、家に帰りたいたいという父の願望を支えようと決意された覚悟、そして真剣に向き合ったその夜に亡くなられた事、それらのことは最期にお父さんの尊厳ある死の実現をサポートされたのだと感じました。全力が全力を引き出し、しっかりと受け継いでおられることが参加された皆様に伝わったのではないのでしょうか。

77 歳から詩を書き始められた中島まさのさんの「老い」を紹介しました。

ひょこんとカレーの作り方がわからんようになる

ひょこんと指が動かんようになる ひょこんと目がくっついてあかんようになる

ちょちょここないなって 足に杖がいるように 心に杖がいるようになった

誰かに居て欲しいと思うようになった まだまだと思ったけど

こないして 年がいくんやなあ

（中島まさの詩集「ふしぎ」より引用）



10月8日、Yさんがお亡くなりになった日、私は夜勤でした。Yさんはケアハウスに住んでおられ、普段は夕食の声掛けに行くとベッドからさっと起き上がり、シルバーカーを押して食堂に出て来られていました。しかしその日は、息苦しそうにされ、ベッドに座っておられました。食堂には出て来られそうにない様子だと日勤職員から申し送りがあり、状態をみに5階に上がると自力で食堂に出て来られ、夕食を食べ始められていました。「大丈夫ですか。」と尋ねると、しっかりとした声で「大丈夫です。」と返事がありました。しかし日勤職員からは「いつもと違う様子で心配。」と言われ、5階の他の利用者からも「みてあげてね。」「お願いね。」と声をかけられました。夜間訪問の利用者ではありませんでしたが、何かあるのかも知れないと胸騒ぎがし20時過ぎに訪問すると、鼻から出血されており、その際も息苦しそうにされていました。受け答えはしっかりされ、ベッドから起き上がり、血液で汚れたシーツを交換することも出来ました。0時に訪室すると、ベッド上で横向きの体勢で大量に吐血されていました。訪室前に予想もしていなかった状態に、何をどうしたらいいのか分からないまま、Yさんの名前を呼びましたが反応はなく、脈を確認出来ないで訪問看護師に電話を掛けました。「吐血されていて、呼んでも反応がありません。脈も取れません。」と伝えるとすぐに「とにかく様子を看に行きます。」と言ってくれました。私は平常心を失っていました。看護師が到着した時には、いつも気さくに話す同僚が神のようでした。横を向く度に口から鼻から血液が流れ出て来るのを受け止めながら、ケアを行いました。血液が綺麗に拭き取られ、お顔を綺麗にし終えた元美容部員の色白なYさんには穏やかな表情が戻りました。

夜勤明けにYさんの看護記録を読むと、「右臀部に7cmの腫瘍と、他にも3か所の腫瘍があり、どこかの腫瘍の転移ではないかと疑いがある。今後痛みが出て皮膚が破裂することも考えられる。その腫瘍が転移と考えるなら、原発部位があると思われるので、全身状態の観察も必要」との主治医の診断があり、痛みや生活に支障を感じられないことから、精密検査も積極的治療も望まないことを家族も同意されているという記載がありました。Yさんは認知症を患っておられ食事摂取量が少なくなっているのを忘れて「大丈夫と言っても何回も訊ねてくる、どうもないんやけどなあ、食べるもんもなんぼでも食べられるし」「ここで出されたもんは、全部綺麗に食べています。」と言われているとも書かれていました。Yさんは人に心配されるのを望まれない方だったということもわかりました。10月8日の新聞も、「いつものように一枚ずつにたたんで読まれた状態でテーブルの上に置いてあるわ」と看護師が言ったのを聞き、今日もベッド上で朝刊を読み、5階の窓からの景色を楽しみ、好きな歌を口ずさんで過ごされていたのかな？と看護記録と現場の様子から想像しました。自分の思うように生活されて、弱音も吐かず、生き抜いたYさんらしい人生だったのではないかと思います。

Yさんが亡くなった夜勤明けから「もっとできることがあったのでは？」と考え続け、Yさんの看取りについて振り返り、この原稿を書くことがその答えを探す過程だったと感じています。看護師の「やることはできていたよ。もし朝まで訪問していなかったら、血まみれのまま体が冷えて硬直していたよ。」と言ってくれた言葉も私を支えてくれました。

Yさんのように積極的医療を望まれない利用者さんの終末期ケアの為にも、医療知識の習得に努め、看護師と連携し急変に対応すること、普段関わりの少ない利用者の情報も事前に収集することの必要性を実感しました。ケアハウスやサービス付き高齢者向け住宅の入居者の夜勤中の急変に、一人で対応しなければならない責任感とチームケアの安心感を持ち、今回の経験を生かして、決められたことに囚われることなく臨機応変に対応し、入居者が安心して生活できるように、夜勤に当たりたいと思います。



天台宗教信寺 法泉院 長谷川 慶悟 住職

朝からの雨であじさいの蕾も膨らみはじめました。激しく降る雨が仏教講話の頃にも止む気配はありませんでした。そんな中、大きなコントラバスを抱えてお越し下さったのは、教信寺法泉院の長谷川慶悟ご住職です。今回の仏教講話では、ピアニストの方も一緒に来て下さるとお聞きし、皆様心待ちにしておりました。早くから席に着いて、楽しみにされていました。

長谷川ご住職はコントラバス奏者として有名な方で、世界的にもご活躍されとてもお忙しくされておられます。そしてピアノを弾いて下さるのは、長谷川ご住職の専属伴奏者として、活躍されている横田ちさと様です。お二人の慈愛に充ちた演奏がスタートしました。

- ① バッハ・・・・・・・・ガンバ・ソナタ第2番より2楽章
- ② ボッテシーニ・・・・・・・・エレジー
- ③ ブッチーニ・・・・・・・・誰も寝てはならぬ
- ④ 今様旋律・・・・・・・・黒田節
- ⑤ 日本唱歌・・・・・・・・夕焼け小焼け
- ⑥ いずみたく・・・・・・・・見上げてごらん夜の星を
- ⑦ 滝廉太郎・・・・・・・・荒城の月
- ⑧ 滝廉太郎・・・・・・・・花



懐かしい曲に思いを寄せ、日本唱歌に歌詞を口ずさみながら、あっという間に演奏が終わりました。

ご住職は演奏の後、横田様のご紹介をされた後、「明日は5月8日、花祭りです。4月8日はお釈迦様の誕生日ですが、5月8日に花祭りをする所もあります。お花は仏様の慈悲の心ですね。そして今日は雨が降っています。雨は植物の命です。感謝の気持ちが溢れます。感謝の気持ちが合掌となります。ありがとうございます。」と締めくくられました。

本当に癒しのひと時で、大きな感動に包まれました。悪天候の中、お越し頂き、ありがとうございます。皆様、口々に「良かったなあ、来て良かった、涙が出そうやった、歌詞カード持ってきたかったな。」等、言いながら帰っていかれました。次はいつかも尋ねた方もおられました。また、お願い致します。

(サ高住相談員：岡村 照代)

【行事案内】

第25回 木野雅之ヴァイオリンリサイタル

日 時：7月7日（土）18：00 開場 18：30 開演
場 所：リバティかこがわ2F 大ホール（加古川市野口町長砂 95-2）
料 金：4,000円
問合先：せいりょう園Tel（079）421-7156



【せいりょう園キッズクラブのご案内】



日 時：加古川市内の小学校の夏休み（平日8時～17時）
利用料金：1日 1,000円（半日利用の場合は500円）
場 所：リバティかこがわ2F（加古川市野口町長砂 95-2）
活動内容：夏休みの宿題や自主学習・書道・造形・陶芸 等
利用方法：予約制（定員20名）※別紙申込書有り
問 合 先：せいりょう園Tel（079）421-7156

【求人】

①ケアマネジャー

せいりょう園介護相談室（居宅介護支援事業所）でのケアプラン作成及び相談業務です。初心者・未経験の方も丁寧に指導します。

②ホームヘルパー

ブランクのある方や未経験者の方は、同法人の事業所での研修がありますので、安心してご応募下さい。登録ヘルパーも募集しています。

早朝や夕方の短時間勤務出来る方大歓迎です。

③栄養士

献立作成や発注業務・栄養管理等です。子育てとの両立ができる短時間勤務です。

④キッズクラブの支援員・補助員

夏休み限定のお仕事です。子供たちの活動を支援します。

※詳しくは、せいりょう園Tel（079）421-7156 までお問い合わせ下さい。

見学も随時受け付けていますので、お気軽にお電話下さい。

【せいりょう園空き情報 平成30年5月13日現在】

- サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：11室
（19.1㎡：6室、24.7㎡：3室、25.8㎡：2室、20.4㎡）
 - サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：6室
（33㎡：3室、35㎡：2室、41㎡1室）
 - ケアハウス：空きなし（バス・トイレ・キッチン付 24㎡）
 - グループホーム：空きなし ●グループホームまどか：空きなし
- [問合先] せいりょう園 Tel(079)421-7156/(079)424-3433

